

シャール・タフマースプのキジルバシ政策

羽田 正

トルコマン系を主とする遊牧軍事貴族たるキジルバシは、その強力な軍事力を背景にサファヴィー朝前半期の政治に大きな發言力を有した。彼らの軍事力に依據せざるをえなかつたサファヴィー朝王權にとっては、その武力を温存させつつも、いかに政治への介入を制限するかが常に大きな問題であつた。

この課題に對する一つの解答であつたアッパース一世の政治、軍事改革と、國家創建直後のイスマーイール一世によるキジルバシ對策については、從來の研究でかなりの部分が明らかとなつてゐるのに對して、この兩王の時代の間、十六世紀半ば五十年以上に及ぶタフマースプの治世におけるシャールとキジルバシの關係はこれまで等閑視されてきた。

本發表では、この空白を埋めるべく、タフマースプ時代初期と末期のキジルバシの勢力、全體像を比較、検討し、タフマースプのキジルバシ政策として、(1)ウスタージャルー部との連攜、(2)各部族内に複数の指導者を作り、その結束を弱めること、(3)シャイハーヴァンド部を創設し、王族をワキール(攝政)職に任じたこと、の三點を指摘する。そしてこれらの政策が、それ以後の政治史の流れ、特にアッパースの改革にどのような影響を與えたのかを考へたい。

十一〜十四世紀のマグリブに於ける

Ribāt u Zāwīya

私市 正年

マグリブ(北アフリカ西部)におけるRibāt制度は、聖戦とイスラム擴大のための砦として、イスラムの初期から地中海沿岸各地に建設された。十二世紀ころよりスーフイズムの發展と異教徒との抗争の弱化とにより、Ribātの軍事的性格はしだいに薄れ、宗教的性格を強めていった。この動きと平行して、ZāwīyaやRaddīyaも十三世紀ころよりスーフイー・聖者の修行所・隱遁所として各地に建設されていった。

ところで、こうした諸施設の役割・機能の分析は單に軍事的征服の據點やスーフイズムの發展といった側面だけでは十分とはいえない。本發表では、國家建設や權力増強に果たした役割、イスラム化や商業活動の據點、アジールの機能、祭りの場、雨乞いや異教徒との抗争における聖者の役割、などの多様な側面を十一〜十四世紀のマグリブ世界を對象に考察する。